平成１５年度　8020 公募研究報告書抄録

報告書名：地域高齢者の主観的幸福感と口腔状況および健康との関連に関する研究

研究者名：葛谷　雅文[1)],岡田　希和子[2)],菊谷　武[3)]小澤　晃[4)]山中　克己[2)]
所　　属：名古屋大学大学院医学系研究科　老年科学[1)]
名古屋学芸大学　管理栄養学部[2)]
日本歯科大学歯学部附属病院　口腔介護・リハビリテーションセンター[3)]
愛知県歯科医師会[4)]

【目的】地域の高齢者サークル参加者を対象に、QOL の一指標である主観的幸福感を調査することにより、積極的に社会活動に参加している高齢者の実態を把握するとともに、口腔状況や栄養状態ならびに身体機能が QOL にどのような影響を及ぼしているかを明らかにする。

【対象と方法】対象は、名古屋市Ｓ区の学区の高齢者サークル参加者のうち、本研究調査に書面にて同意を得られた 111 名である（男性 3 名、女性 108 名、平均年齢 65.28±9.4 歳）。主観的幸福感の評価には Philadelphia Geriatric Center Morale Scale (以下、改訂版 PGC モラールスケール) を使用した。本スケールは、「心理的動揺・安定に関わる因子」、「自分の老化についての態度に関わる因子」、「孤独感、不満感に関わる因子」の 3 つの因子と 17 項目から成るものであり、日本の高齢者においてもその信頼性、妥当性が示され、主観的な QOL の尺度として現在汎用されている。口腔状況の調査は、天然歯数、機能歯数、咬合支持の状態をアイヒナーの分類に基づき評価した。また、栄養状態評価（身体計測）として、身長、体重および%体重（JARD2001 による日本の年代別健常人中央値との比較：計測値/中央値×100%）、Body Mass Index(BMI)、体脂肪率、骨密度、上腕周囲長(AC)および%AC、上腕三頭筋皮下脂肪厚(TSF)および%TSF 上腕筋面積(AMA)および%AMA を計測した。身体機能評価として、握力、歩行テスト（3m 往復歩行速度：秒）を実施した。

【結果および考察】主観的幸福感と口腔状況との関連について、改訂版 PGC モラールスケール得点は、天然歯数の多い者(P<0.01)、機能歯数の多い者(P<0.05)、アイヒナー指数による咬合部位が確保されている者(P<0.05)ほど、有意に高い得点を示した。また、スケールの 3 つの主成分については、「心理的安定」は、天然歯数の多い者(P<0.05)、咬合部位が確保されている者(P<0.05)ほど有意に高い得点を示した。「老いに対する態度」は、天然歯数の多い者(P<0.05)ほど有意に高い得点を示した。主観的幸福感と栄養状態、身体機能との関連について、PGC モラールスケール得点は、骨密度の高い者(P<0.0001)、年齢の低い者(P<0.05)ほど有意に高い得点を示した。「心理的安定」は、骨密度の高い者(P<0.0001)、体重の重い者(P<0.05)、体脂肪の高い者(P<0.05)、AC の高値を示した者(P<0.05)ほど有意に高い得点を示した。「老いに対する態度」は、年齢の低い者(P<0.01)、BMI の低い者(P<0.01)、%AC の低い者(P<0.01) 、身長の高い者(P<0.05)、%体重の低い者(P<0.05)、AC の低い者(P<0.05)、歩行速度の速い者(P<0.05)ほど有意に高い得点を示した。天然歯を失うことは心身の健康の強い喪失感につながると考えられる。幸福な老いは高齢社会において重要な問題であり、口腔状況をはじめとした今回見出されたような因子が高齢者の主観的幸福感を左右することが示唆された。